小林道夫　チェンバロ

チェンバロ、ピアノ、室内楽、指揮など活動が多方面にわたる第一人者。特にバロック音楽に造詣が深く、バッハ演奏では最高の評価を得ている。毎年年末には、J.S.バッハ作曲「ゴルトベルク変奏曲」のリサイタルを開催している。室内楽プログラムも多彩で、長年のキャリアに裏付けされた深い解釈は日本のみならず、世界各地で高く評価されている。1956年毎日音楽賞・新人奨励賞、1970年第1回鳥井音楽賞（現サントリー音楽賞）、1972年ザルツブルク国際財団モーツァルテウム記念メダル、1979年モービル音楽賞、2019年度第30回日本製鉄音楽賞特別賞、2022年大分合同新聞文化賞受賞。
現在、大分県立芸術文化短期大学客員教授。

Profile

大塚直哉　チェンバロ

東京藝術大学大学院チェンバロ科、アムステルダム音楽院チェンバロ科及びオルガン科を修了。チェンバロ、オルガンの奏者として活発な活動を行うほか、これらの楽器に初めて触れる人のためのワークショップを姫路、宮崎、埼玉、上野など各地で行っている。現在、東京藝術大学教授、国立音楽大学講師、日本チェンバロ協会会長。NHK FM「古楽の楽しみ」案内役。

©Eiji Shinohara

川瀬麻由美　ヴァイオリン

桐朋学園大学卒業後、東京ゾリステンのコンサートマスターを経て、東京シティフィルハーモニック管弦楽団の副コンサートマスターに就任。1987年に皇太子殿下を楽団長として結成された梓室内管弦楽団やロイヤル・チェンバーオーケストラのコンサートマスターの他、小澤征爾、ロストロポーヴィッチ両氏によるキャラバンコンサートやサイトウキネンオーケストラに出演。現在、大分県立芸術文化短期大学教授、福岡教育大学非常勤講師、iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラ芸術監督。

筌口和実　ヴァイオリン

大分県立芸術緑丘高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部弦楽専攻を卒業。
これまでに河村雅絵、川瀬麻由美、豊嶋泰嗣の各氏に師事。
iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラに初年度より約8年間所属。
大分県立芸術文化短期大学オーケストラ演奏員、iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラアカデミー講師。
現在、大分を中心に九州各地で演奏活動を行っている。

長石道子　ヴィオラ

大分県立芸術文化短期大学音楽科器楽専攻、専攻科を卒業・修了。平成14年度高文連音楽コンクール九州大会グランプリ受賞。第3回ヴェルデ音楽コンクール弦楽器部門総合2位。ヴェルデプレステージュ賞受賞。第8回九州音楽コンクール弦楽器部門大学生クラス最優秀賞。第8回別府アルゲリッチ音楽祭大分県出身若手音楽家コンサートにデュオで出演。
現在、長崎OMURA室内合奏団、大分県立芸術緑丘高非常勤講師、iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラアカデミー講師。

田村朋弘　チェロ

大分県立芸術文化短期大学音楽科器楽専攻を卒業、同大学専攻科を修了。
2009、2011年バッハストリングアンサンブルのメンバーとしてイギリスでの演奏会に出演、第13回長崎おぢか国際音楽祭にてマスタークラスの講師を務める。
その他主に九州内を中心にソロ、室内楽、オーケストラ等の演奏活動を積極的に行っている。第5回九州音楽コンクール金賞及び最優秀賞受賞。
大分県立芸術文化短期大学非常勤講師、iichikoグランシアタ・ジュニアオーケストラ講師。

亀子政孝　コントラバス

福岡大学及び平成音楽大学卒業。その後文化庁派遣海外研修生として英国王立音楽院修士課程修了。イーリングフェスティバルオブミュージック（ロンドン）、宮日音楽コンクールグランプリ等受賞。現在、長崎OMURA室内合奏団団員、平成音楽大学講師。

本日は、iichiko総合文化センター所有 1998年製 アトリエ フォン・ナーゲル社（フレンチ2段チェンバロ）と中村ピアノ工房所有 1990年製 SOUICHI NAKAMURAを使用します。

主催
お問合せ

iichiko総合文化センター　【(公財)大分県芸術文化スポーツ振興財団】
Tel：097-533-4004　〒870-0029 大分市高砂町 2-33
kikaku@emo.or.jp　iichiko総合文化センター

後援　大分県、大分合同新聞社、J:COM 大分ケーブルテレコム、エフエム大分、ゆふいんラヂオ局、月刊・シティ情報おおいた

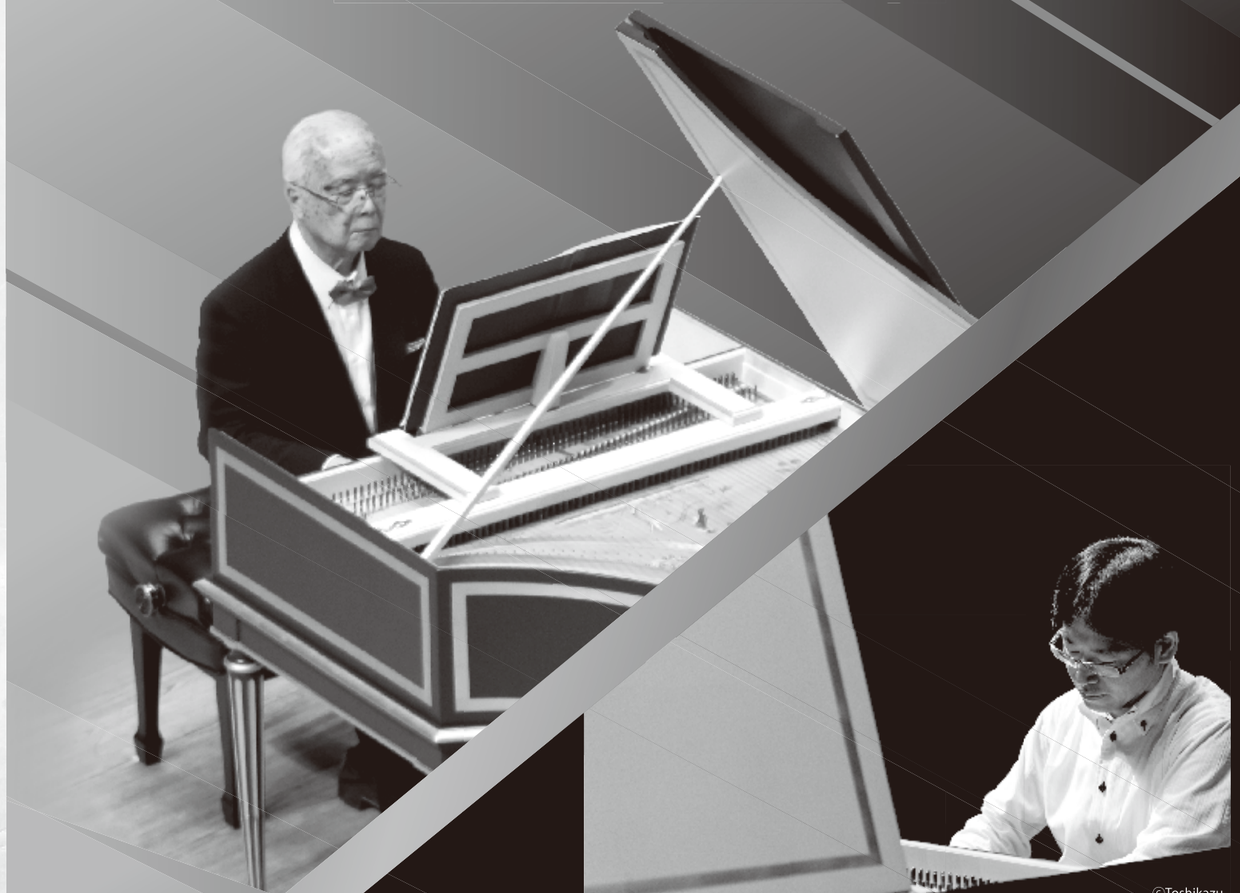
大分県企業局

iichiko presents

小林道夫　大塚直哉

2台のチェンバロコンサート

バッハから後世へ～継承される音の調和～



©Toshikazu

2024年
10/5（土）
開場 13:30
開演 14:00　16:00 終演予定

iichiko総合文化センター
iichiko音の泉ホール

公演詳細

大塚直哉 バッハの2台チェンバロ協奏曲について語る

2024年9月2日(月)に開催した大塚直哉氏による事前レクチャーをもとに、**音楽ジャーナリスト**の**渡辺 和**（わたなべ やわら）氏が執筆しました。

大塚直哉氏に拠れば、「バッハとその家族の作品だけの演奏会は多々あるも、特定の時期に演奏された作品を纏めて披露する例はそれほど多くはない」とのこと。本日演奏される４曲は、どれもヨハン・セバスチャン・バッハ(1685-1750)が教会と街の音楽責任者として過ごしたライプチヒで、40代後半から50代の油が乗りきった頃に自ら鍵盤の前に座って演奏したと思われる作品ばかり。

この頃のバッハは、大学町の学生が組織するコレギウム・ムジクムという民間オーケストラの音楽監督を務めておりました。冬場は当時流行となっていたコーヒーハウス店内、夏には市内に多数ある庭園で、毎週金曜日午後8時から10時まで様々な器楽や声楽曲を披露しました。要は、現在の私たちが普通に親しんでいるコンサートとほぼ同じイベントです。聖書の内容を音楽で説教するカンタータや受難曲、高度な音楽知識を持ち、自らもプロ並みに演奏し、音楽的理解も高度な貴族宮廷のための器楽作品とは異なり、誰もが様々なレベルで聴いて楽しめる音楽がここにあります。とはいえ、バッハはバッハ。一筋縄ではいかないあれやこれやも。

Program

J.S. バッハ　2台チェンバロのための協奏曲　第1番 ハ短調 BWV1060
第2番 ハ長調 BWV1061
W.F. バッハ　2台チェンバロのための協奏曲　ヘ長調
J.S. バッハ　2台チェンバロのための協奏曲　第3番 ハ短調 BWV1062

J.S. バッハ　2台チェンバロのための協奏曲

第1番 ハ短調 BWV1060（チェンバロ2台＋弦楽五重奏）

第1楽章、ハ短調四分の四拍子。第2楽章アダージョ、変ホ長調八分の十二拍子。第2チェンバロが歌い始め、第1チェンバロが5度上で同じ歌を奏でる。やがて第2チェンバロが最初の歌をハ短調にして歌い、これを繰り返す。第3楽章アレグロ、ハ短調四分の二拍子。

今回は小林先生が1番チェンバロ、私が2番チェンバロを弾きますが、余りにそれぞれの音符が違うんですね。普通、2台チェンバロの作品にはそういうことがないので、この曲は別々の楽器のための協奏曲を編曲したと推測されています。原曲は残っていませんが、ヴァイオリンとオーボエの為の協奏曲があり、それを2台チェンバロにしたのではないか、と。それを復元した人がいて、今ではそちらが有名になってるんですけど、今回は楽譜が遺っている2台チェンバロで演奏します。

管楽器と弦楽器なら違えるのは簡単です。でも2台のチェンバロで弾き分けるのはなかなか難しい。チェンバロだとメロディは右手でできるので、左手が余ってる。通奏低音を弾きながらソロを弾くことになるわけです。調律が合っていれば良いのですけど、狂っているとパチンコ屋の中みたいになってしまう（笑）。そうならないように、と思ってます。（大塚直哉）

第2番 ハ長調 BWV1061（チェンバロ2台）

第1楽章、ハ長調四分の四拍子。第2楽章、イ短調のゆっくりした八分の六拍子。弦楽合奏はなく、対位法的に充実した音楽。第3楽章フーガ、ハ長調四分の四拍子。十六小節の第1チェンバロ独奏がフーガを導く。

この曲にはチェンバロ2台の版、それにオーケストラ付きの版が残ってます。オーケストラは休んでる箇所が多く、後から付けたことが良く判ります。チェンバロが一生懸命弾いているのを、「そうだそうだ」と頷いてくれるようなオーケストラパートが付いているのです。チェンバロは高い音は聴きやすいんですけど真ん中と低い音は聴き難く、2台チェンバロのテクスチャーで聴くと良く判るので、小林先生のご提案で今回は2台チェンバロで演奏します。（大塚直哉）

W.F. バッハ　2台チェンバロのための協奏曲 ヘ長調（チェンバロ2台）

J.S. バッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマン(1710-84)が、最初の就職先ドレスデン聖ソフィア教会オルガニストに就職したばかりの20代前半に作曲。1742年に父が写筆した楽譜も遺され、ひと頃までバッハ父の作品と思われていた。第1楽章アレグロ・マ・モデラート、ヘ長調四分の四拍子。第2楽章アンダンテ、ニ短調四分の二拍子。第3楽章プレスト、ヘ長調八分の三拍子。

この人は凄く音楽の才能があったのは間違いなく、お父さんバッハが溺愛していた。ドレスデンのソフィア教会のオルガニストになり、辞めてハレのオルガニストになる。バッハが亡くなって長男という後ろ盾がなくなり辛い思いをし、だんだん仕事がうまくいかなくなって、宮廷にも務めましたが仕事を辞め、70とか80まで生きて最後は困窮のうちに亡くなったと記録にあります。世間からの無理解もあったでしょうし、上手くやれないタイプだったということもあるみたいです。残っている作品はホントに素晴らしいですし、オルガン好きの方はバッハの《トリオ・ソナタ》という曲をご存じでしょうが、あれはフリーデマンの曲ではないかと言われるくらい、バッハの創作にも良い刺激を与えた人です。

ただ、鍵盤曲は天才的なひらめきがあるんですけど、恐らく天才故に書き遺すということにエネルギーが割けない。どれも素晴らしいんだけど短く、素晴らしい楽想もパッと次に行ってしまう。ソナタ、ポロネーズ、ファンタジーとか良い曲があるんですけど、本人が弾いたらもっとこれは長かったんじゃないかな、と思うことがありますね。

お父さんバッハは、ひとつのものを丁寧に丁寧に展開していくことに関心があり、伝統的な技術としてそれが凄く充実している。楽譜をみてみると、お父さんの楽譜は隙間恐怖症みたいにメロディが密に並んでる。その間に、他の人がやるはずのメロディもその人がやるように書いてあり、隙間がないんですね。独特の溢れそうな感じを生んでるのがバッハの魅力だとすると、フリーデマンは隙間を上手く使える。お父さんはフリーデマンのことを凄く才能があると言ってたらしいんですけど、自分にはない、音のないスペースを上手く使えるところを認めていたのかもしれません。バッハの曲を聴いてきてフリーデマン・バッハを聴くと、隙間だらけだ、と思うかもしれない。それはお父さんバッハの耳になっていますね（笑）。

オーケストラが付かないのにヘ長調でコンチェルトとありますが、お父さんの「イタリア協奏曲」も協奏曲って書いてあるのにオーケストラとか付いていませんよね。ヘ長調というのはなかなか協奏曲にはありませんね。それから2楽章は、追いかけっこを二人でやります。最後の楽章は、オクターブをチェンバロが4手のユニゾンで弾いたり、凄く迫力のある音になるんじゃないかと思います。これをお父さんと弾いたのかもしれませんね。（大塚直哉）

第3番 ハ短調 BWV1062（チェンバロ2台＋弦楽五重奏）

バッハ30代のケーテン宮廷時代に書かれ、今も人気のふたつのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調BWV1043がオリジナル。第1楽章、ハ短調四分の四拍子。第2楽章アンダンテ、変ホ長調八分の十二拍子。第3楽章アレグロ・アッサイ、四分の三拍子。

研究の結果、この音符は別の旋律楽器からのもの、チェンバロのためではない、と言われています。ソプラノからバスまでのコーラスをひとりで弾けるのが鍵盤の宿命。でも、ひとつの楽器で完結する魅力もありますよね。この曲は、そんなひとつの宇宙である鍵盤を2台並べてぶつける。最後の楽章では、それぞれのチェンバロが「今、話しかけないで欲しい」というようなややこしいフーガを弾きながら、2台目が入って来ます（笑）。上手くいくと六声とか八声とかの素晴らしいふたつの宇宙が醸し出すものになりますし、そうでないと2人が喧嘩になってしまう。ある意味、とてもバッハらしい。（大塚直哉）

小林道夫について

小林先生とお話していると、エリザベート・シュヴァルツコップ（注：20世紀半ばドイツ語圏を代表する名ソプラノ）はそこではブレスしなかった、などと仰って下さるのです。フィッシャー＝ディスカウ（注：20世紀後半のドイツ・リートを背負った歴史的バリトン）やヘルマン・プライ（注：20世紀半ば、オペラブッファからドイツ・リートまで幅広く大活躍した人気テノール）など、昭和の頃の充実した良い演奏家と共演なさり、知っていらっしゃった。

それから、ピアニストをやりながらチェンバロもおやりになります。モダンチェンバロをやった人がヒストリカルチェンバロも弾いている。チェンバロ奏者としては、ほぼ前人未踏なんです。あらゆる意味で、いろいろな音楽のあり方をすべて、丁寧に吸収していらっしゃる。長い歴史をずっと見ていられたその方が今でも弾いている。僕たちは追いつかないなぁ、と思います。学生にはとても厳しいのですけど（笑）、有難いことです。（大塚直哉）